

稻富氏の著書「無と直観」

鹿野 治 助

稻富氏の近著「無と直観」は最近興味深く讀めた。特に第三章「産む無と成る無」及び最後の章「觀照」とには、興味津々として夜の更くるを覺えざらしむるものがあつた。蓋しプロティノスに於いて「かくあるべかりしもの」、少くもかくありたきものが氏に依つて巧みに解釋され又論ぜられてゐるからである。第一章第二章第四章第五章は先づプロティノスの哲學の根本概念の敘述であつて、ここには別して注意する程のことはない。併し氏一流の平易な表現でよく述べられてゐる。だが我々に特に關心深く思はれるのは第三章と第五章とであり、又氏の最も力を入れてゐるのもこの部分である。左に大略を紹介し二三の所感を加へて見たいと思ふ。

第一章は一者で氏の所謂「上なる無」若しくは「産む無」であり、第二章は質料氏の所謂「下なる無」若しくは「成る無」である。而して第三章はその關係であり、

そして一者と質料とが結合せねばならず同一のものでなければならぬとするのが氏の主眼である。而してこのことを詳論し多くの方面から明かにせんと心しつつ睿智や靈の敘述をなしたのが第四章と第五章とである。最後の第六章の「觀照」は第三章の論を第四章第五章に述べしものを介しつつ詳論したものであつて、ここに氏の全力が注がれて居りそして又最も麗しきものである。プロティノスの哲學に於いて一者と質料との關係、從つて又流出と觀照とが最も根本的なそして又最も困難な問題であることは、何人も異論のない所であらうと思ふ。この問題を取り揚げて終始一貫明快に論じた氏の手腕と苦心とは蓋し大いに多とせらるべきものと思ふ。

氏に依ると先づ一者と質料とは共に無である。併し兩者は單純に同一物なのではない。無とは云ひ乍ら前者は能動的であり後者は所動的である。前者は何物でもない

が何物をも産む無であるに對して、後者は何物でもないが何物にでも成り得る無である。而も前者と後者とは始めから對立的に存する二つの原理ではなくして、後者は前者の中にあるものである。西田哲學からの影響と思はるる氏自身の表現に依れば質料は一者と異なるものではなくして質料は一者の被限定面なのである。超在たる一者の面と無在たる質料の面とが完全に自同的なることを承認せんとする氏は、質料が一者に先立つ別個の原理であるならば一者は萬物に對する唯一至上の原理ではなくなるといふこと、更に質料は一者が物を産むに先立つての一者に依る被造物でもあり得ないといふ點よりして、一者と質料との關係は「質料を一者自身の受働的被限定面として其の中に包攝してこそ、始めて一切の存在は一者自身が一者自身の中に於いてする自己限定となる」(一〇三)といふのである。かくては氏は一應一者と質料とに能働所働、産む成るの差別を區別し乍ら兩者は完全に自同的であることを主張するのである。つまり一者と質料とは同一物の兩面、正と負との兩面となすのである。右のことが第三章に論ぜられてゐる。

所で一者と質料とが同一だとか結合すると云つても、

一者は何物をも介在する事なく直接に質料と合一するのではなく、叡智、靈魂、自然の三段階を介在してゐるのである。而して上なる一者が中間的存在を下降して、質料と合一する爲の下への道は生産に外ならない。かくて氏は前に一者と質料との合一すべきことを主張したが、その事は叡智が靈を産み靈が更に降つて感性界に結ぶといふ上から下への生産の道に依らずしては、首肯されないと云つてゐる。併し右の如くであるならば一者と質料とが直接結ぶといふことは理解出来なくなる。一者が質料を自分の被限定面として有する爲には、兩者間にある中間的存在が消えて兩者が相直接するのでなければならぬ。氏はかく考へて中間的存在のなくなつた直接的合一に導かうとする。併し單なる生産の道丈ではそれは達せられない。そこに氏はこの生産の道の外に、それと共に下から上への道、觀照を招來し、この理解から目的を達しようとする。下から上への道は觀照であるが、觀照にも存在の程度に依つて強弱眞偽の段階的差別が考へられる。又觀照は生産とその方向を逆にしてゐる。併し兩者は別個のものではなく、相即不可分のもので「觀照は實はその儘生産であり、生産は實はその儘觀照であ

る」(二〇五)。そしてそれは同時である。併し觀照はこの二方向丈でなく更に自身にとどまる方向を有つ。かくて觀照は向上と向自と向下との三者を有ち、そしてその三者は一味融合してゐる(二〇七)。而してそれらの間には本質的とか派生的とかいふ差別がない。従つてある存在がその本源に還るなら、それに即して直に末流に降ることが考へられ、そしてそれが又自分にとどまることになる。かくて觀照は本源への歸入を含むから、それは如何なる段階から出發してもその極まる所物は總て一者の世界へ歸一する。又觀照の向上に即して向下の方向があるから、それはどの段階から出發しても極まる所質料に迄達するのではなければならぬ。従つて觀照は窮極に於いて一者と質料との合一をを目指すのである。故に極限に於いては一者の面と質料の面とは直接する。神の世界に安らふことが質料の面への浸透を外にして只一方的のみ考へられるものではない(二一四)。氏は右の如く論じて一者と質料との直接なる結合を論結する。氏は生産の道丈では一者と質料とは直接しないが、それに即してある觀照があるならば一者と質料とは凡ゆる隔壁を徹して直接すると云ふ。併しその場合氏は「一者から無限に

隔ることがその儘直に一者に向つて無限に還ることを意味する觀照の極限に於いては」と云ひ極限といふことを幾度か繰返してゐる。所で極限といふことは矢張間接といふことを意味するのではないか。そこには下への無限の段階があると同様、上への無限の段階があるのである。故に氏は又「直接の合一と云つても、それは無限に還ると無限に離れるとの極限に於ける合一であるから、それが何物をも介在することなき單純素朴の自己同一でないことは云ふ迄もない」(二一六)と云つてゐる。だからただ觀照の導入丈では不十分である。最も大切なことは氏が觀照の極限といふエクスタシスであり、この頓でなければならぬ。故に氏はかくてエクスタシスを述べエクスタシスの立場から、生産の場合の介在をして又觀照の場合の隔りを撤去するのである。つまり生産に於いて考へられ、觀照に於いて尙とれなかつた隔壁を消して仕舞ふのである。エクスタシスに於いては質料は消えて一者丈になる。一者丈になつて質料の全然なくなつた處、そこを氏は一者と質料との合一といふのである。といふのは向上と向下と同一にして、質料は一者に上り切り一者は質料に降り切つただから。かくてエクスタシスの

境涯からすれば嘗て考へられた一者から質料迄の距離は奪はれて質料と直接に合一する。故に萬物は萬物であり乍ら、靈は肉體にあり乍ら一者であり、山川草木國土悉皆はその儘成佛する。寧ろそれらが最もそれら自身である時に一者であり佛なのである。かくて氏は或は穢土即寂光土と云ひ或は「其處では觀るもなく觀られるもなく、純粹透明なる絶對無の面に、燦然たる本來の姿が浮游するのみであらう。無といへば無の極致、有といへば有の極致、動もなく靜もなく、作爲もなく休息もなく、只自體眞如といふの外ないのである」(二四八)と美しく云つてゐるのである。この様にして畢竟一者と質料とは同一であり、一者は一者自身の中に質料を被限定面として自己限定をするのである。従つて一切萬物は悉く一者の自覺内容であるといふのが氏のプロテイノス觀である。

氏のプロテイノス觀は結局西田哲學の色合ひを帯びつつ佛敎などの考と同一になつてゐる様に思はれる。眞理のぎり／＼の所には昔もなければ今もなく、東も西もないと信じた自分には愉快な所論である。併し氏の如き見解は、所詮プロテイノスの哲學の複雑多方面の中から

取捨選擇をした解釋といふ批評は免れないと思ふ。氏自身ありし儘のプロテイノスの姿でないと思はれてもあるべかりしプロテイノスの解釋と斷つてゐる所以でもある(一〇三)。プロテイノスについては何等かの解釋なくしては進み得ない。それはどの様な書についても云へようが、プロテイノスに於いては特にそれが著しい。徹底せしめればそれ丈解釋的になることは避けられないと思はれる。かく云つても稻富氏の論が無造作に主觀的だといふのではない。氏は難解なるプロテイノスの文をよく解釋し適切に引用して論を進め啓蒙する所が多い。併し果してプロテイノスはかくの如くであらうかと問ふ時、未だ全體的にはうけがふことの出来ないものがある。それは一言で云へばプロテイノスの一者は結局有たる性格を脱却し切つてゐないのではないかといふことで盡きる。苟くもエクスタシスが覺として本當のエクスタシスであるならば氏の論の如くでなければならぬ。さうあるべきであり、またプロテイノス自身殆んどさうある様にさへ思はれるのであるが、未だ一つにならぬものがある様に思ふ。佛敎の考で解することは寧ろ非常な誘惑を感ずるのであるけれども、併し又それ丈警戒せねばなら

ないのではないか。表面的に見る時、兩者の間には全く同一と思はるる言句が相當見つかるのであるが、併し尙歴史的背景に掘り下げて見る時一方は東洋、他方はギリシヤのものとして全く別物なのではないか。歴史的に解決することは平凡化することであるかも知れないが。

左にその様なものの二三の例を取り揚げて見よう。例へばエクスタシスに於いて見るに、靈は一者に上り切つてゐると共にそれは肉に徹してゐるのであらうか。無の極致に達すると共に有の極致に達してゐるのであらうか。それは餘り強く云へないのではないか。向上向自は同一と認められても向下はどうであらう。無論稻富氏も云ふ様にプロテイノスは肉體を離れんとして自殺することを認めない。といふのは自殺することは却つて靈が肉體に執してゐることであるから。(そして若しその様にして肉體を離れたのであるならば、その靈はやがて他の肉體の中に轉生せねばならぬから) (ピュタゴラス派の思想ならん)。併し氏の如く肉體に徹するといふことはどうであらうか。自殺を禁じたからと云つてそれは肉體に徹することではなく、肉體を使用せねばならぬ止むを得ない場合を除いては出来る丈肉體との共同を避け、ゼウス

の神が肉體から開放して呉れる迄、出来る丈この世で清く生きるといふ消極的方面が強くないだらうか。そこにはプラトンの「パイドン」的なものが残つてはゐないであらうか。向上向自向下の三者で云へば一應同一であると云はれ乍らも、矢張向上が優越性を有つのではないか。唯一方的丈とは云へないが優劣はあるであらう。一者に達してから又火の消えた様に重くなつてそこから墮するとか、見ることから墮しても又自分の中に於ける徳を目醒ましそして自己を全く秩序づけ再び軽くなつて又一者に達する(VI 91)とか云ふことも何らか考慮されねばなるまい。次に行爲や制作を取つて見よう。行爲や制作も廣義の觀照であるが、狹義の觀照に比較する時それらは後者よりも低次のものである。プロテイノスではどこ迄も觀ることが目的で、制作や行爲が目的のではない。後者は前者の不完全なものであり、前者の廻り道なのである。直接觀ることが出来ないから行爲をしたりつくつたりするのである。觀る(向上)ことは生産(向下)であると云はれた場合でも、生産は觀ることの結果であり自身目的なのではない。故に行爲や制作にはそれが直に一者であるといふ所がなく、一者に達すれば觀た

のであるから行爲や制作は要らぬ。行爲や制作をすれば又一者から離れたといふことになるのではなからうか。アリストテレスに於いての様に行爲や制作はテオリヤより不完全にして低次なるものといふ側面がプロティノスにもあり、そしてその限り矢張一者は有を脱却してゐないのでなからうか。一者から降るといふことは一者に徹した儘有の極致に徹することではなく、そして又それは一者から降りてその影像である質料的なものになるといふ所があるのではないか。その他自由にしても一者に達する時道德的立場を脱却し、道德などを必要としない境地に達する。併し現實の個々に限定し來るといふ所がなく、又永遠や時間に見ても、時間なき永遠へ達する側面はあつても、そこからして永遠に即した時間と云つた様な所がないのではないか。少くとも豊かではないと思ふ。プロティノスの一者は凡てを越えると云つても形相の方へ價値的の方へ越える。超在超善超美なのである。従つて無とは出ても有とは出ない。縦ひ有とは出ても麻三斤とが乾屎橛とは出ないのではないか。時を否定して又是剛好肉了去劫已前來劫後吹毛匣裏靈光寒和盤托出夜明珠とは出ても、昨晨掃却舊年煤今夜鍊磨新歲鏈帶根松

矣葉加桶還着新衣待客來とは出ないのではないか。

最後に氏の著書につき形式的なことを一言するならば、括弧づきの相當長い引用文に屢、箇所の指示が落ちてゐたこと、それからギリシヤ語の綴が幾つか違つてゐたことなどは遺憾であつたと思ふ。

擱筆するに當つて繰返して云ふ「無と直觀」は最近興味深く讀めた良書である。

(東京理想社 菊版 一二五六頁 定價貳圓四拾錢)